

一途な信仰心や飾り気のないユーモア、幼稚な恐怖心に接したときの心が浄化されるような爽やかさが甦ってくる。それはまた、これらの宗教的伝説を少しの疑いもなく信じ、受け継いできた古代人の素朴さと純一さへの親しみであり、憧れである。

これらの伝説を通して、金峯山の清らかさと厳しさへの憧れが一層深いものになったこと、今も金峯山の神秘性への憧れは消えることなく続いていることは言うまでもない。

〈樋口一葉研究〉——日記にみる意識の流れ——

第三回卒業 保坂 ゆう子

樋口一葉は父・兄を早く失い、若い女性の身でありながら一家の柱とならなければならなかった。生活の資を得る事を目的として小説を書き始めながらいつか全力でそれにぶつかっていった。こんな一葉は世の中をどう捉え、文学を恋愛をどう考えていたのであろうか。一葉の日記は様々に評されるが、日記を中心に丹念に読み、一葉の意識の流れを社会観・文学観・恋愛観に分けて考えてみる。

第一章 一葉の教養と悩み (略)

第二章 日記について (略)

第三章 一葉の意識の流れ (要約)

第四章 一葉の人間像 (略)

社会観

早くから小説を書き、戸主として世の中に出ていった一葉は世の中をどう考えていたのであろうか。

明治二十四年ごろは決して悲観絶望ばかりで世の中をみているのではない。身分の上下も貧富の差も心掛けの違いによるものであり、心掛け次第で世の中はどのようにでもなると考え、希望も幾分かは持っていたのである。だから命のある限り努力しようとするのである。このように考えていた一葉も明治二十八年になると、実際にはいくら努力しようともどうにもならないと考えるようになるのである。何事もほどほどにして、見るめ次第ではすばらしいものであるとあきらめてしまい、ついには、この世の中は仮の姿で誠のない夢のようなものであり、はかないものであるとおもうのである。貧乏人にとつては冷たく、儘ならない世の中であると考えている。

文学観

世間のきびしさを知り、すばらしいものを書きたいと願っていた一葉はどんな文学観をもって小説を書いていたのであろうか。

「真情に訴へ、真情をうつす」(m・24・11)これが一葉の日記に最初に記された文学観であり、生涯これを貫いている。一葉は小説を書く上で大事な事は、前記の他に、

完全無瑕のものをつくる (m・26・2・6)

誠の天地を見出す (m・26・2・9)

おもひの馳するまま、心の趣くままに書く (m・27・7)

世道人情をもととする (m・26・11)

愛憎好悪の念を捨てて、かくれたるを顕し、うつもれたるを照らす (m・26・11)

ことであると考えた。このように考えながら実際に書いた作品とは遊離してしまつてついに結びつくことがなかったのではないかと思ふ。これは、常に一葉は、何のために小説を書くのか、名譽のた

めか、衣食のためかと悩んでいたためであろうと考える。

恋愛観

一葉の残した作品はどれも皆、恋に破れる女性達を描いているが一葉は恋というものをどう考えていたのであろうか。

一葉の恋愛観は、日記には、
尊いもの

たのしくうるはしくのどかに清らかにまこと円満完了のもの

あさましきもの

只よにおかしく、あやしく、のどかに、やはらかに、悲しく、おもしろきもの

尊く、あさましく、無さんなるもの

厭ふ恋こそ恋の奥成けれ

と記されている。初めは、恋を明いあこがれを持ってみているが、わずか一年足らずのうちに、暗いみじめな気持で恋というものを捉えるようになっていく。一葉は恋にあこがれ、恐れ、恋をはかないものと定め、はかないと知っている恋をどうしてもあきらめきれずにそれにしがみついて、ついに『にこりえ』のような作品を書いた。どの女性にも一葉の血が通っているのである。

古代文学に現われた他界観念に

ついでの一考察

第四回卒業 阿部 良子

隠口こもりぐちの泊瀬少女はつせせうじよが手に纏まとける玉は乱れてありといはずやも『万葉集』卷三、四二四

国文学、特に古代文学の研究は、日本歴史との関連の上からとらえなければ解明出来ない問題が数多くあるように思う。右の歌は、「死者の身につけた玉の緒を切る」という、古い慣習をふまえた作品であることがわからずに、いまだに諸注の解釈は安定していない。古代の文学研究、特に神話研究においては、民俗学や文献批判学、比較神話学などの研究成果に立脚して、多くの問題が解決され、また続々と解明されつつある。神話の類型や伝播のありさまは、文化人類学や比較神話学の前進により、しだいに明らかにされてきた。

わが国の神話は、『古事記』『日本書紀』の神代巻に主として記録されている。七世紀後半から八世紀のはじめの段階に、現実の皇室や諸氏族とのかかわりにおいて、きわめて体系的にまとめられたものである。それは、神話本来の姿に作為を加え、潤色して出来上がったものである。しかし、だからと言って、記紀神話を無視しては日本の神話の本源は探ることは出来ないであろう。作為、潤色される前の本来の姿はどうであったか。文学としての「記紀」の内部から神話の本質を追求しようとする努力が、もっともっと要求されるのである。それと同時に、日本神話の独自性は、わが国の風土と歴史の中で、もっとあきらかにすべき問題である。

私は考古学に対する興味から、わずかながら考古学の研究成果も学んで来た。卒論では私の考古学の若干の知見と、これまでの神話研究上の成果を踏まえ、「記紀」神代巻でも興味ある問題とされるイザナキ黄泉国訪問神話を中心に、わが国古代に生きた人々の他界観念の、如何なるものかを探ってみることを試みた。

記紀の物語る黄泉国が、一体どのような世界かということについ